

ハンス・ザックスとグリム兄弟

KHM 147 「焼かれて若返った小男」を例に

加 藤 耕 義

1 序

ヤーコブ・グリム（1785-1863）とヴィルヘルム・グリム（1786-1859）によって編纂された『家庭と子供のメルヒェン集』には、ハンス・ザックス（1494-1576）の詩を元にした話が5話収められている¹。この5話を採録された順に並べると次のようになる。

KHM 147 Das junggeglühte Männlein（焼かれて若返った小男）

<初版第2巻（1815）より>

KHM 148 Des Herrn und des Teufels Getier（神の獣と悪魔の獣）

<初版第2巻（1815）より>

KHM 77 Das kluge Gretel（かしこいグレーテル）

<第2版（1819）より>

KHM 119 Die sieben Schwaben（7人のシュヴァーベン人）

<第2版（1819）より>

KHM 180 Die ungleichen Kinder Evas（エヴァの不揃いな子供達）

<第5版（1843）より>

「KHM」とは決定版である第7版（1857年）での番号である。『家庭と子供のメルヒェン集』は7つの版を重ねてゆく間に話の削除や追加を経験しているため、採録順に従うと順不同になるが、KHMが付けられていることは、この5話がメルヒェン集に収められて以来最後まで削られることはなかったということを示している。

さて、最初のKHM 147とKHM 148は初版第2巻（1815年）から収められており、どちらもハンス・ザックスの詩のみを元にしている。これに対しKHM 77とKHM 119は第2版（1819年）から、そしてKHM 180は第5版（1843年）からメルヒェン集に採録され、この3話のいずれもハンス・ザックスと他のテキストを組み合わせられて書かれたものである²。

そこでこの小論では、最初に採録されたKHM 147を取り上げ、ザックスとグリムの文章の比較を行いたいと思う。一つには他の類話との混交がないため、ザックスとグリムのみの比較に的を絞りやすいからであり、もう一つには、KHM 147は最初に採録されたということもあり、KHM 148に比べ、グリムの文章がよりザックスの詩に忠実であり、またそのため、グリムが後に版を重ねて行く中で変更点も多く、グリムの推敲の過程にも触れることができるからである。

さて、ここでハンス・ザックスを取り上げるのは、一つはグリムのメルヒェン観への興味からであり、もう一つはグリムのハンス・ザックスに対する評価がどのように文章に表れているかという興味からである。

まず、グリムのメルヒェン観についてであるが、グリムはメルヒェン集の編集にあたって初版以来つねに元の語りに忠実な語りを心掛けてきたことを述べている。初版第1巻（1812年）の序文には次のようにある。

私達はこれらのメルヘンを出来る限り純粋に理解するよう努めてきました。＜中略＞いかなる状況も書き加えたり、美化したりまたは修正されてはいません。なぜなら私達には、それ自体これほどまでに豊かな言い伝えをアナロジーや類似で膨らませることがはばから

れたからです。³

この初版第1巻を手にしたアヒム・フォン・アルニム（1781-1831）はこの発言に対し、同年12月24日のヤーコプにあてた手紙で次のように批判している。

ぼくはこのように主張することで君を驚かせたくはないが、言わずにはいられない。君達の「子供のメルヒェン」が、いかに君達がそれを受け取ったとおりに書き記したと信じようとも、ぼくはそれを決して信じない。形づくろうとする衝動そしてさらに作り続けようとする衝動は人間の中ではあらゆる決意に勝り、決して消し去ることはできないのだ。⁴

この批判に対しヤーコプはアルニムに宛てた12月31日の手紙で忠実には二通りあるのだと反論している。

数学的な忠実さはまったく不可能であり、もっとも事実通りのもっとも厳格な歴史においてすら数学的な忠実さは存在しない。しかしそんなことは問題ではない。なぜなら忠実さとは本来にあるものであって、見せかけなんかではないからだ。それを我々は感じているし、だからまた忠実さに対しては忠実でないということが真っ向からぶつかるのだ。君が自身を殻に残さずにたまごを割ることができないのと同様、君は完全に細部までぴたりと語ること是一切出来ない。それはあらゆる人間的なものの結果であり、たえず変化してゆく流儀なのだ。適切な忠実（die rechte Treue）とは例えて言うなら、私が黄身を壊さないということだ。君が私達のメルヒェン集の忠実を疑うとしても、適切な忠実さを疑ってはならない。なぜならそれはそこにあるのだから。⁵

このヤーコブの発言は、メルヒェンには壊してはならない部分があることを強調していると同時に、文章にする場合には変えざるを得ない部分もあることを示している。変更した部分については、グリム兄弟自身が一番良く知っているわけであるが、こうした論争を経て、第2版の序でも、彼らの仕事の忠実さへの確信は、やはりはっきりした口調で述べられている。

私達がここに蒐集した方法に関して、まず忠実さと真実 (Treue und Wahrheit) が重要でした。つまり私達は独自の方法から、何もつけ加えず、言い伝えのいかなる状況や特徴すらも美化しませんでした。私達は私達が受け取ったとおりに、その内容を再話したのです。個々の表現や仕上げが大部分私達に起因するということは自明のことですが、私達はこの点でメルヒェン集に自然の多様性をとどめるために、私達が気づいた個々の特徴を保つよう努めました。⁶

『子供と家庭のメルヒェン集』の7つの版を比べてみると明らかだが、実際グリムは版を重ねる中で文章に手をいれているし、すでに挙げたザックスの5話の内3話が類話との合成によって書かれていることからわかるように類話をつなぎ合わせ補うこともしている(類話との合成については、それが矛盾のない限り行ったことをグリムは初版2巻の序の中で断っている⁷)。しかし、序に表れている「忠実と真実」への確信は、こうした変更点すらも彼らが求める真実へ近づくための変更であったことを示唆している。その意味でグリムがオリジナル(元の語りまたは本)から何を変更したかは非常に興味深い問題である。その変更点にはグリムのメルヒェン観が表れているはずである。グリムのメルヒェン集第7版のうち約8割が口承から採録されたもので、約2割が先行のテキストからとられたものであるが⁸、オリジナルとの比較ということでは、それら先行テキストとの説話比較が非常に有効である。

ここで、この小論での第2の興味、すなわち、グリム兄弟のザックスに対する評価の問題に触れておく。種々ある先行テキストの中からザックスを取り上げる理由は、ヤーコプもヴィルヘルムも非常に早い時期から、ザックスを学問的興味の視野に入れており、非常に高く評価をしていたと思われるからである⁹。ヤーコプはすでに1807年の小論『職匠歌とミンネザング¹⁰』の中でザックスに触れているし、またヴィルヘルムも1808年の論文『古ドイツの文芸の成立と北欧の文芸との関係について』でザックスについて述べている。そしてメルヒェン集のなかに、ザックスの詩から5話も取り上げていること自体その高い評価の表れといえよう。

ヤーコプのザックスに対する評価は次の短い引用から窺える。

ハンス・ザックスは全てを詩の形にしたのであって（dichten）、詩を創作する（erdichten）ことは一切せず、名前を挙げて引用した原典から保証することを好むのだが...¹¹

ヤーコプは文芸を自然文芸（Naturpoesie）と創作文芸（Kunstpoesie）に分けて考え、前者の自然文芸こそが民族に行き渡った、無意識かつ忠実に純粋なものであるとして、高い価値を認めている¹²。したがって上の引用から、ザックスが勝手に創作したのではなく、典拠を挙げて古いものを伝承していることを高く評価していると考えることができる。

ヴィルヘルムも文芸に対しヤーコプと非常に近い考え方をしているが、創作文芸にも相応の価値を認め、ザックスを次のように位置づけている。

創作文芸（Kunstpoesie）、すなわち意識と意図でもって作られたものは、その基本的な考え方からすれば自然文芸（Naturpoesie）、国民文芸（Nationalpoesie）と同様に素晴らしいものである。なぜなら創作文芸が本物であれば、それは自然文芸や国民文芸を続行してゆくだけだからである。つまり自然文芸、国民文芸が衰退し、もう新

しく生み出されないところでは、創作文芸がたとえば博識さでもって、国民の精神の内にすでに獲得されている素材を、国民に固有なものの全てでもって作り変えるからである。それは国民固有なものが根をおろして馴染んだものになってゆけるためにするのである。ハンス・ザックスはこの意味で創作詩人（Kunstdichter）であり同時に国民詩人（Nationaldichter）である。素材を明晰に把握し使いこなす能力が備わっているのだ。そして詩人の個性（Individualität）は国民の個性の中で完全に失われ、またはむしろ詩人の個性はもっと浄化され、そしてふたたび国民の個性の中で純粋なものとなる。¹³

ここでは国民文芸（Nationalpoesie）が自然文芸（Naturpoesie）と同義で使われており、したがってヴィルヘルムはザックスの詩の中に創作文芸（Kunstpoesie）と自然文芸（Naturpoesie）両方の要素を認めていると言うことができる。

このようにヤーコプもヴィルヘルムもザックスを非常に高く評価しているが、ザックスの詩をメルヒェン集に取り入れる際に、もちろん全てをザックスに従ったわけではない。そこには彼らが信じる「忠実さと真実」に従い、彼らの理想のメルヒェン像に近づけようとする姿勢が見られるはずである。そこで、グリムがザックスのどの部分を評価しそれに従ったのか、また手を加えた部分が何を目指しているのかをザックスとグリムのテキスト比較から読みとってゆきたい。

2 ザックスとグリムのテキスト比較

2 - 1 押韻の扱い

既に述べたように、比較を行うのはグリムの KHM 147 「焼かれて若返った小男（Das junggeglühte Männlein）」とその元となったハンス・ザッ

クスの 1562 年のテキスト「笑話：猿の起源（Schwanck: Ursprung der affen.）」である。ここではまず具体的な比較に入る前に、全体を通して言えることから触れておこう。

ザックスの詩は初期新高ドイツ語の文で書かれており、1 行に揚格を 4 つもち、2 行 1 組で脚韻を踏む、いわゆるハンス・ザックス詩句の形になっている。それに対し、グリムの文は古い言い回しを採り入れながらも¹⁴、新高ドイツ語の文に改められており、また脚韻を踏んでいる語の採用を見るまでもなく、実際韻を踏んでいる語を 2 語とも採用している例はほとんどないが、散文の形になっている。韻の不採用については、グリムはすでに初版第 1 巻の序文で次のように述べている。

多くの場合、物語が押韻や詩句によって腰を折られることがみうけられます。その上、時にははっきりと頭韻を踏んでいることすらあります。しかし語る場合にはけっして歌われることはありません。そしてまさにこれこそが最も古く最高のものなのです。¹⁵

兄弟が理想としていたメルヒェンの語りとは、彼らが知り合ったツヴェールン村の農婦フィーメニンの語りである。グリムは初版第 2 巻の序で、彼女の語りを絶賛している¹⁶。こうした民間で口伝えにより語り継がれるメルヒェンには、韻、すなわちヤーコブの言葉を借りるなら、ザックスがまさしく詩にした（dichten）部分、ヴィルヘルムの言葉ではザックスの創作詩人（Kunstdichter）としての部分は不要だったのである。また、韻についてやはり初版第 1 巻の序で、スカンジナビアの中世英雄叙事詩「ケンベヴィーゼ」を評価しつつも、それらが歌謡で、歌われるためのものであるから、子供達にはふさわしくないと書いている¹⁷。これらのことを総合すると、韻の削除は、「子供と家庭」を視野に入れ、広く読まれることを目指しつつ、かつ「メルヒェンの語り口」を重視した変更であり、このメルヒェン集全体に関わるグリムのメルヒェン観の表れと言えよう。

2 - 2 グリムが削除した部分（語りの変更）

まず、削除部分の問題に触れる前に、グリムの KHM 147「焼かれて若返った小男」の筋をごく簡単に書いておく。

神がまだ地上を歩いていた頃のこと、ある晩神がペトルスとともに鍛冶屋の家に泊めてもらうことにする。そこへ年老いた乞食がやってきて、鍛冶屋に施しを乞う。哀れに思ったペトルスは乞食を若返らせるよう神に頼む。神は鍛冶屋の炉を借り、火を焚いて乞食をその中にいれ、若返らせる。鍛冶屋はこれを見て、神が旅立った後で、自分のお義母さんも若返らせてみようとお義母さんを炉に入れるが、失敗する。お義母さんは火消し桶の中でしわくちゃになり唸っている。お義母さんの悲鳴を聞きつけて2階から駆けおりてきた鍛冶屋の奥さんと息子の嫁（二人とも妊婦）は驚いてその日のうちに猿のような男の子を出産する。生まれるとすぐにこの子供達は森にかけこみ、それが猿の起源である。

さて、ここでグリムがザックスの詩から完全に削除した部分について触れたい。グリムはザックスの詩から導入部と結末部、そしてそれに続く教訓をすべて削除している。これは、物語の構造に関わる重要な変更である。以下にザックスのテキスト¹⁸と対訳を記す。

Hans Sachs

Schwanck: Ursprung der affen.

笑話：猿の起源

- | | | |
|---|--------------------------------------|---------------------|
| 1 | Ein doctor fraget ich der mår, | ある博士に私は次のことについて尋ねた。 |
| 2 | Von wann die affen kemen her, | いつから猿は生じたのかと。 |
| 3 | Weil sie ohn vernunft thierlein wild | なぜなら猿は理性のない野獣であるのに、 |

- 4 Sind, tragen doch samb menschlich bild; 人間と同じ姿をしているからである。
5 Obs auch im anfang wern erschaffen. 猿もはじめてから創造されたのかどうか。
6 Er antwort mir her: Von den affen 博士は私に次のように答えた。「猿について
7 Hab ich von eim zyeuner gehort 私はあるジブシーから
8 Gar wunder- und seltzame wort, 猿がどんな起源をもつか
9 Wie sie haben ire ursprieng. 実に不思議で奇妙な譚を聞いたことがあります。」
10 Sagt: Weil Christus auff erden gieng, 曰く「キリストが地上を巡っていたので、

∴ < 中略 >

- 116 Weiß doch nicht, ob mir war und recht しかし私には、ジブシーが言ったことが
117 Der zigeuner hat zugesagt, 本当のことかどうか分かりません。
118 Weil iederman sonst ob in klagt, なぜなら、だれもが彼らのことについて
119 Wie all zigeuner liegen gern. ジブシーはみなよく嘘をつくと嘆くからです。
120 Iedoch solt dus annemen wern しかしあなたはそれを
121 Allein für einen guten schwanck. 単によくできた笑い話と思って下さい。

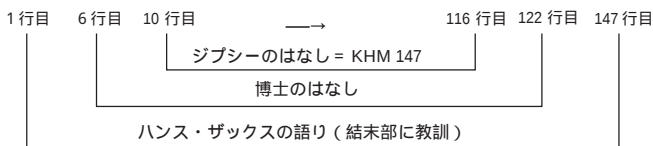
122 Der beschluß: むすび

- 123 Ich sagt dem doctor lob und danck. 私は博士に賛辞と礼をのべた。
124 Auß disem schwanck finden sich sehr この笑い話からはじつに
125 Zwo gar getrewer nutzer lehr. 2つの実に信頼のおける有用な教えがある。
126 Die erst lehr, daß ein schwanger weib 最初の教えは、身重の女性は

∴ < 中略 >

- 147, spricht Hans Sachs., 曰くハンス・ザックス。

この導入部と終結部はザックスの詩が枠構造で語られていることを示している。まず 1 行目で「私」という語り手（＝ザックス）は、博士に質問したところから話を始める。そして 6 行目 “Von den affen” から博士がやはり「私は」で始まる直接話法で語り始める。そして 10 行目から、ジブシーが話した内容が博士の口を通して語られる。このジブシーから聞いた内容のみがグリムによって採用されている部分である。そして猿の由来についての話が終わったところ、すなわち 116 行目から再び博士が「私」の見解を語りだす。そして博士の話が終わると、122 行目の「むすび」からザックスが登場し、このお話についての教訓をたれるという構造になっている。



この状況を、今仮に目の前にザックスがいて、聴衆を目の前に語っていると仮定してみたい。落語を想像してみると非常に分かりやすいが、最初ザックスが太鼓のお囃子にのって登場する。「エー、このところ実に変な事件が多いですな。ところで私も先日妙な博士に会いまして…」とザックスが語り出す。この時点で観客はザックスの今日の出し物はなんだろう、と期待して耳をすませている。つまりこの時点ではザックスが語っていることが聴衆に非常に意識されており、かつ聴衆はまだ現実の世界に留まっているわけである。そしてザックスが続ける。「その博士がこんなことを申しまして、（ここでザックスは声色を博士風に低くする）予は先日あるジブシーからこんな話を聞いたのだが…」ここから徐々に観客には目の前で語っているのがザックスではなく博士に見えてくる。現実の世界から一歩虚構の世界へ脚を踏み入れた段階である。そしてジブシーから聞いた内容が始まると、観客はまもなく博士の存在も忘れてしまう。この時点で観

客は完全に虚構の世界に入ったことになる。そしてジブシーから聞いた話をし終えると、再び博士が前面に出てきて、観客は博士がいたことを思い出す。その上博士は「私には、ジブシーが言ったことが本当のことかどうか分かりません。」と言って観客を現実の世界に引き戻す。観客が現実の世界に戻ったところで、ザックスは声色を元に戻し、本日の教訓を語る。観客は完全に現実の寄席にいることを意識し、目の前には博士ではなく、ザックスを見ているのである。

さて、この構造をグリムがそのまま取り入れたとしたらどうなるであろうか。まず、「私」という語り手（Ich-Erzähler）の存在の異質さが非常に目立つ。メルヒェンの語りでは、こうした形で語り手¹⁹が前面に出てくることが非常にまれである。メルヒェンの語り手は出来るだけ早く聞き手を虚構の世界へいざなおうとする。それは何よりも「むかしむかしのことでした（Es war einmal...）」に代表される発端句によって行われる。マックス・リュティエはこの発端句をメルヒェンの最も純粋な定式（Formel）と定義付け、次のように説明している。「この定式はこれから始まる物語をすぐさま語り手と聞き手（もしくは読者）の現実から切り離す。同様にその際の過去時称もとりわけ物語的な機能をもっている。それはケーテ・ハンプルガーの理論によるフィクション化の意味においてだけではなく、これから一つの閉じた、それゆえに全体が展望できるストーリーが語られるということをはっきりと示しているという意味においてでもある。...『むかしむかし』という発端句は現在とそれにまつわる現実から距離を保ち、別な世界、過去のすなわち存在していない世界へ踏み入れることを促すのである。²⁰」

結末句についても同様である。リュティエはメルヒェンの代表的な結末句として「彼らは死んでいなければ、今日でもまだ生きています（Und wenn sie nicht gestorben sind, so leben sie noch heute）」を挙げており、それが語り手と聞き手を現実へと引き戻す機能を持つものとしている。この様に、メルヒェンでは語り手と聞き手（読者）を結末句によって唐突に現

実に引き戻す場合もあるし、または、結末句がまったくない場合も多いのである。

したがって、もしグリムがザックスの詩の構成をそのまま取り入れていたとしたら、それはメルヒェンの語りからは逸脱するものとなっていたであろうし、メルヒェンの聞き手（読者）は、ザックスの構造、すなわち現実から徐々に虚構に連れて行き徐々に現実に戻す構造に戸惑いを憶えることになる。グリムが削除した部分はグリムにとってはザックスによる創作文芸（Kunstpoesie）としての部分であったといえよう。

ちなみに上の引用で省略した最後の教訓には、おおよ次の二つのことが書かれている。（１）妊婦は自分の体と振る舞いに配慮をすべきである。（２）術を学ぼうと思う者は、基礎から学ばねばならない。

この教訓もザックスによる創作文芸（Kunstpoesie）の部分であり、グリムにとっては当然不要であった。

2 - 3 ザックスとグリムのテキスト比較

さて次にグリムが採用した部分について、多少長くなるが、全文を比較したい。なお比較に際しては、ザックスのテキストに従い、グリムのテキストは出来る限りそれに対応するよう改行してある。またグリムのテキストは初めに採録された初版第 2 巻を用いている。

Hans Sachs
Schwanck: Ursprung der affen.

Grimm（初版第 2 巻 61 番）
Das junggeglühte Männlein.

- | | | |
|----|---------------------------------------|---|
| 10 | Sagt: Weil Christus auff erden gieng, | Zur Zeit da unser Herr noch auf Erden ging, ²¹ |
| 11 | Kehrt er eins tags mit Petro ein, | kehrte er eines Abends, sammt Peter, |
| 12 | Woltn bey eim schmid zu herberg sein, | bei einem Schmied ein, und bekam willig Herberg. |
| 13 | Der nams willig zu herberg an. | |

まず目に付くのはグリムの版の 10 行目最初の“Zur Zeit”である。この行を訳すと、「私達の主がまだ地上を歩いていたころ」であり、これは既に上で述べた「むかしむかし（Es war einmal...）」と同じ働きを持つ発端句にあたるものである。したがって、グリムはこの“Zur Zeit”を挿入することによって、メルヒェンの形式に整えたと言える。“Zur Zeit”で始まる形式は KHM 127 Der Eisenofen（鉄のストーブ）と共通の形である²²。KHM 127は、グリムが理想とするフィーメニンの1813年の語りに基づくものであり、1815年の初版第2巻から取り入れられた。ここではおそらくその形に従ったものと思われる。

次に“Christus”という語をやめ、“unser Herr”という語に置き換えた点について触れておく。これはグリムのメルヒェン観に関わる重要な変更である。

グリムはメルヒェン集の序の中で、メルヒェンが非常に古い起源を持つものであることを繰り返し述べている。例えば初版第1巻の序では「メルヒェンが時の流れの中で常に新たに生まれることも確かです。しかしまさにそれ故にその根底が非常に古いものであるに違いありません。」²³と書いている。また、初版第2巻の序では「これらの民間メルヒェンには、失われたと思われている太古の混じりけのないドイツの神話が保持されています。そして今なお私達の祖国のすべての恵まれた地域を探そうとするなら、この方法で、忘れられた宝が思いもよらなかったものへと変わり、そして我々の文芸の起源を探る学問の基礎を築くことに寄与すると私達は固く信じています。」²⁴と述べている。したがって、グリムにとってのメルヒェンの古さとは、なによりも神話へと遡ることを意味する。さらに、神話の神々についてヤーコプ・グリムは『ドイツ神話学』の中で、例えば神話の善良な神々までもが、キリスト教の概念の中で悪魔へと変貌していったように、キリスト教によって歪められ、そこに取り込まれていったことを繰り返し述べている²⁵。上記の箇所の変更はまさに神話の神々とキリスト教との関係に関する問題が意識されたものと考えられる。このことを裏

付けているのは『ドイツ神話学』の序文にある叙述である。「神，または 2 人 3 人の神々が天から地上に降りてくるということは，我々の神話の元々の共通性に数えられよう…。それをキリスト教の神の常在や全知への信仰は傷つけたのである²⁶」。そしてその例として，オーディーンやトールやロキなどの神話の神々の名を挙げ，特にオーディーンについては彼が鍛冶屋に立ち寄ることを述べている。そしてまさにこのKHM 147 のペトルスとキリストをその同一の例として挙げている。つまりヤーコブはこのペトルスとキリストの後ろに神話の神々の姿を見ており，この 2 人の人物を単にキリスト教の人物として描くことがはばかられたものと思われる。加えて，メルヒェン集の第 7 版では子供のための聖者伝を除く本編 200 話の中で「キリスト」という語は全く出てこない。もちろんグリムは「聖ペトルス」という語を残しているし，また置き換えた“Herr”という語は「キリスト」の意味も含んでいるわけで，ザックスに従いキリスト教の要素も残しているが，“Christus”という語を意識的に取り除くことで，神話的な方向へと近づけていると言えよう。

11 行目で“eins tags”が“eines Abends”になっているのは，旅の者が宿を乞うのは普通晩であり，整合性がとられている。

12 行目では，ザックスの“mit Petro”がグリムでは，“sammt Peter,”となっている。しかしこれは 1819 年第 2 版からは“mit dem heiligen Petrus”となってコンマが無くなり，逆にザックスの原文に近づいている。初版で用いられた“Peter”という語は決定版では一切使われていない。すべて“Petrus”という語に統一され，そのうちのほとんどが，“heilig”という形容詞を用いた語に統一されている²⁷。

次に“Herberg”という語についてであるが，初版，第 2 版ともに，ザックスと同じ“Herberg”が使われていた。これは第 3 版から新高ドイツ語の標準的な語形“Herberge”に直されている。

上記の引用箇所については，ザックスの文では主語が 10-11 行目が“Christus”，12行目が“Christus und Petro²⁸”，13行目が“Schmid”と変わっ

ているのに対し、グリムは主語を“Herr”に統一しており、文章として明瞭になっている。したがって、ザックスの 13 行目で動詞が“nam...an”となっており、「鍛冶屋は彼らをこころよく泊めた」となっているのが、グリムでは“bekam”「こころよく泊めてもらった」となっている。

- | | | |
|----|-----------------------------------|--|
| 14 | Nun kam ein armer bettelman | Nun geschah's, daß ein armer Bettelmann, |
| 15 | Hinein gingen an zweyen krucken | von Alter und Gebrechen hart gedrückt, |
| 16 | Mit grawem haar und bogem rucken | in dieses Haus kam und vom Schmied Almosen forderte. |
| 17 | Und mit dem alter hart beschwert, | |
| 18 | Das allmuß von dem schmid begert. | |

ここはグリムが大幅に変更している箇所である。最初の副文を伴う形，“Nun geschah's, daß...”という形はグリムのメルヒェン集で好んで使われているもので、ザックスが「さて(Nun)」の一言ですませているところをグリムは「さて、次のようなことがおきました。...」という形にしているのである。この形は、第 7 版では“Da geschah es, das...”, “Es geschah, daß...”なども含めると 20 以上の用例が見られる。その元になった語り手は様々であるため、特定の語り手から取られたというより、グリムが話を先に進めるときの句として、好んで利用したものと考えられるであろう。

14 行目から 17 行目にかけてのザックスの乞食の描写はグリムでは非常に簡素にされている。乞食が 2 本の杖をついて来たことは省略され、白髪頭で背中がまがっていることも削られている。メルヒェンの、形容しすぎない簡素な語りが目指されている。

- | | | |
|----|--------------------------------------|--------------------------------|
| 19 | Deß erbarmet sich Petrus sein | Deß erbarmte sich Petrus |
| 20 | Und sprach: O herr und meister mein, | und sprach: „Herr und Meister, |
| 21 | Erbarm dich deß uralten mann, | so dir's gefällt, |
| 22 | Heyl ihm sein plag, daß er mög gahn | heil' ihm doch seine Plage, |

23 Und sein brodt selber mög gewinnen! daß er sich selbst sein Brot möge gewinnen.“

ここではあまり大きな変更はないが、いくつかの削除が見られる。

グリム 19 行目の“Deß”は第 2 版までこの形であるが、第 3 版からは“Des”に改められている。

ザックスの 19, 20 行目の“sein”, “mein”は押韻のために入れられている要素が強く、特に重要な意味は担っていない語なので削られている。

ザックスの 21 行目「この老人を哀れと思し召し下さい」という部分は 19 行目と重複するため、削られている。

ザックスの 22 行目の「彼が歩けるように」という部分は上の文でグリムが鍛冶屋が杖をついている描写を削っていることからここでも削られている。

24 Der herr mit senfftmütigen sinnen Sanfmüthig sprach der Herr:

25 Durch sein bitt erbarmet sich deß

26 Und sprach zum schmid: Leih mir dein eß „Schmied, leih’ mir deine Esse

27 Und leg mir deiner kolen an, und leg’ mir Kohlen an,

28 Daß ich den alten krancken mann so will ich den alten, kranken Mann

29 Verjüngen mög zu diser zeyt. zu dieser Zeit verjüngen. “

ザックスの最初の 2 行は説明的な文章である。「暖かい御心の主は、彼の願いによってこの男を哀れに思し召し」という文章を、グリムは「心やさしく (sanfmüthig)」という副詞 1 語に置き換えている。ここまでの数行について言えることであるが、ザックスの文章は心理描写が多くなっている。しかし、そもそもメルヒェンでは内面の描写が表れることはまれである。マックス・リュティエーはメルヒェンが登場人物を描く場合の特徴として次の様に指摘している。「メルヒェンはその登場人物の内面生活や感情や気分についてほとんど語らない。それはまさに図形的登場人物であり、

ストーリーの担い手である。彼らの心の奥行きは、たいていの場合ほのめかされることすらない²⁹。したがって、ここでグリムが行った変更は、よりメルヒェン本来の語り口に近いものである。

ザックスの28-29行目の文は「私が、この年老いた病人を今この瞬間若返らせることができるように」という副文であるが、グリムはこの副文をやめている。したがってより口語的な響きとなっている。

- | | | |
|----|------------------------------------|---|
| 30 | Der schmid gantz willig war bereyt | Der Schmied war ganz bereit |
| 31 | Und kolen in die esse trug | |
| 32 | Und sanct Petrus die blaßbelg zug, | und St. Petrus zog die Bälge, |
| 33 | Als nun auff-funcket das kolfewr | und als das Kohlfeuer auffunkte, |
| 34 | In der eß groß und ungehewer, | groß und hoch, |
| 35 | Da nam der herr das mennlein alt | nahm unser Herr das alte Männlein, |
| 36 | Und schub es in die eß gar baldt | schob's in die Esse, |
| 37 | Hinein das flammend fewer rott. | mitten in's rothe Feuer, |
| 38 | Drinn saß das mennlein, lobet gott | daß es drin glühte, |
| 39 | Und glüet wie ein rosenstock. | wie ein Rosenstock, und Gott lobte mit lauter Stimme. |

ザックスの31行目はグリムでは削られているが、30行目ですでに準備ができたといっているため、不要と考えたのであろう。

32行目“sanct Petrus”はグリムでもザックスの形に従ってそのまま“St. Petrus”となっている。第7版までこの形が守られているが、すでに述べたようにグリムのメルヒェン集ではたいてい“der heilige Petrus”という形が用いられており、第7版において、この“St. Petrus”が出てくるのはここ1箇所のみである。

33行目の“Kolfewr”は“Kohlfeuer”と移されているが、第2版からは新高ドイツ語の“Kohlenfeuer”に改められている。

さて、形容詞の語順について、他にも多くの例があるが、代表してザッ

クスの 35 行目の“das mennlein alt”に触れておこう。形容詞が無語尾で、修飾する名詞のあとに来るのは中高ドイツ語ではよく見られる例であり、ザックスの時代の初期新高ドイツ語でも、その名残として見る事が出来る。グリムのテキストでは、新高ドイツ語の語順（変化語尾付き）“das alte Männlein”に改められている。

38 行目から 39 行目にかけ、ザックスの版では老人は、1) 火の中に坐り、2) 神を讃え、3) 薔薇の枝のように燃える、という順番で事が進んで行くが、グリムの版では「火の中に坐り」という部分は省略され、1) 薔薇の枝のように燃え、2) 神を大声で讃える、という順序に改められている。この入れ替えによって、火の中で老人が気持ちよくいる様子がより明確になっている。

39 行目のグリム“mit lauter Stimme”はおそらく、グリムによって任意に付け足されたものと推測されるが、この語を挿入したことで、ザックスの説明的な文章にくらべ、状況の描写がより生き生きとしている。

- | | | |
|----|--------------------------------------|--|
| 40 | Nach dem der herr zu dem leschdrock | Nachdem trat der Herr zum Löschtrog, |
| 41 | Das glühend mennlein hinein zug, | zog das glühend Männlein hinein, |
| 42 | Daß das wasser ob ihm zsamb schlug | daß das Wasser über ihm zusammenschlug, |
| 43 | Und kühlet es fein sitlich ab. | und nachdem er's fein sittlich abgekühlet, |
| 44 | Nach dem ihm seinen segen gab. | gab er ihm seinen Segen; |
| 45 | Zuhand das mennlein herauß sprung | siehe, zuhand sprang das Männlein heraus, |
| 46 | Schön, zart, gerad, gesund und jung, | zart, gerad, gesund |
| 47 | Ein jüngeling bey zweintzig jarn, | und wie von zwanzig Jahren. |
| 48 | Deß sie alle verwundern warn. | |

ザックスの文章では 40・41 行目にわたって動詞“zug”が働いており、また押韻のために語順が乱れ、非常に読みにくなっているが、グリムは 40 行目に“trat”という動詞を補うことでこれを 2 つの主文に分け、明解

な文章にしている。グリムの 41 行目 “das glühend Männlein” は第 2 版で形容詞の変化語尾が付けられ “das glühende Männlein” と直されている。

グリム 42 行目の “über ihm” という形はザックスにならって 3 格を取っているが、後の版³⁰では “über ihn” という 4 格に変え新高ドイツ語の文法に整えている。

45 行目の “siehe,” はグリムの加筆である。直訳すれば「ご覧なさい」であり、語り手が読者（聞き手）に対して呼びかけていることになるが、「するとどうでしょう」に似た、話を先に進めるための一瞬の合いの手のようなもので、話の流れを妨げるものではない。この形はやはり KHM127 Eisenofen（鉄のストーブ）に出てくるもので³¹、おそらくはフィーメニンがそう語り、それを取り入れたものかも知れない。

46 行目はグリムでは形容詞 “schön” と “jung” が削られている。残った形容詞は 3 つであり、3 回重ねるというリズムはメルヒェンが好む調子である。また “zart, gerad, gesund” はどれも “t” の音で終わり、口調が良いのであるが、第 3 版からは新高ドイツ語の語形に従い “gerade” と直されている。

48 行目が削られているのは、状況描写であると同時に心理描写の要素が強いからであろう。

43 行目 “sittlig” は第 3 版まではそのままであるが後の版で “sittig” に変えられている。これと同じ例は KHM 77 Das kluge Gretel（賢いグレーテル）にも見られ、やはり第 3 版までは “sittlich” であるが、第 7 版では “sittig” に変えられている³²。

- | | | |
|----|------------------------------------|---|
| 49 | Der schmid die ding gar eben sach | Der Schmied, der eben und genau zugesehen, |
| 50 | Und lud sie zum nachtmal darnach. | lud sie alle zum Nachtmahl, |
| 51 | Als man zu tisch nun sitzen thet, | |
| 52 | Der schmid ein alte schwiger het, | er hatte aber eine alte, halbblinde bucklichte Schwieger, |
| 53 | Bogrucket, hincket und halb blind, | |

ハンス・ザックスとグリム兄弟（加藤）

- 54 Die setzt sich zum jüngling geschwind, die machte sich zum Jüngling hin
55 Welchen der herr verjunget hett,
56 Und ihn gar fleissig fragen thett, und fragte ihn fleißig:
57 Ob ihn das feuer hart hett brennet. ob ihn das Feuer hart gebrennet?

49・50行目についてグリムは関係文の形を整え、第3版までこのままであるが、後の版でさらに文法的にはっきりと過去完了の文にし、“der eben und genau zugesehen hatte,”としている。

ザックスの51行目からは文章のつながりが多少わかりにくくなっている。52・53行目で鍛冶屋に年老いた義母がいたことが挿入句的に入っているためであるが、グリムは51行目を削除することで流れを整えている。

56行目のグリムの“und fragte ihn fleißig”はザックスの文に忠実であるが、のちに3版から“und forschte ernstlich,”と変更している。老婆の熱心な様子は表れているが、さほど必要な書き換えとも思えない。

57行目のザックスの文は接続詞“ob”に導かれている間接疑問文であるが、グリムはこれを前行の「：」で導き「？」で終えている。そのため、文型としては間接疑問文であるにも関わらず、直接疑問文に近づいた中途半端な形になっている。しかし第3版からは「：」が「，」になり、また“gebrennet habe.”という形に変更され、完全な間接疑問文に整えられている。

- 58 Er aber ir warhafft bekennet,
59 Nie baser ihm gewesen wer, „Nie sey ihm besser gewesen,
60 Denn in dem feuer, da wer er antwortete jener, er habe da in der Glut gesessen,
61 Gesessen, wie in eim külen thaw. wie in einem kühlen Thau.“

ここでも引き続き、グリムのテキストは動詞の形の上では間接話法であるのにもかかわらず、引用符がつけられ、直接話法のような形になっている。

る。58行目の「しかし彼は彼女に真実を打ち明け」という文を削除していることからみても、グリムがむしろ直接話法に近づけようとした様子が見てとれるが、第2版からは引用符を削除し、ザックスに従った間接話法にとどめられている。

- 62 Das vast zu ohren die alt frau Dies klang die ganze Nacht in den Ohren der alten Frau
63 Und gar durchauß die gantzen nacht
64 An das verjungen stets gedacht.
65 Frü zog der herr wider sein straß, und als der Herr frühmorgens die Straße weiter gezogen war,
66 Dem schmid der herberg dancken was. und dem Schmied wohl gedankt hatte,
67 Der schmid dacht, die kunst ist nit schwer, dachte der,
68 Ich kan sie gleich als wol als er,
69 Ich wil mein schwiger auch verjungen, er könnte seine alte Schwieger auch jung machen,
70 Daß sie auch geht daher in sprüngen da er fein ordentlich alles zugesehn,
71 Wie ein meidlein bey achtzehn jarn. und es in seine Kunst schlage. Rief sie daher an,
72 Nun wolt ers auch an ir erfarn, ob sie auch wie ein Mägdlein von achtzehn Jahren
73 Sprach: Schwiger, ich hab in der nehen in Sprüngen daher wolle gehen?
74 Die kunst gelernet von dem gesehen,
75 Wie er mit dem kolfewr geschlacht
76 Das alt mennlein hat jung gemacht.
77 Sag mir, ob du nit gern auff erden
78 Wolst auch also verjunget werden,
79 Wollest auch in die eß hinein.

最初の3行はザックスの文では義母の内面描写になっており、これはすでに述べたように、メルヒェンにはそぐわないものである。グリムはこれをうまく1行にまとめ、状況描写にしている。

グリムの62行目の“dies”（このことが）は3版より “Was der Jüngling

gesagt hatte,”（若者が言ったことが）と副文に直され、具体的で子供にも分かりやすく、よりメルヒェン的な言い回しになっている。

65 行目からはグリムでは接続詞“als”によって導かれる副文に変えられているため、過去完了の時制になっているが、そのほかに大きな変更点はない。

67 行目グリムの“dachte der”は第3版より“meinte dieser”に変更されている。グリムの大きな変更点は、それに続く文章がザックスの場合直接話法の形であり、主語が“ich”であるのに対し、グリムは前の行の“dachte der”にしたがって間接話法を用いていることである。しかし73行目では最後に「？」がつくことで、やはり直接話法と間接話法の間の揺れをみせている。しかしこの場合もグリムの第3版からはピリオド「。」に変更されている。

また73行目“wolle”は第3版まではそのままであるが、後の版ではザックスの78行目に従い“wollte”と接続法2式の形に改められ、相手の意向を聞く控えめな言い方に変えられている。

大きな変更ではないが、グリムの70行目“zugesehn”は第2版で“zugesehen”，第3版で“mit angesehen habe,”と改められている。

上の引用部分全体についてはザックスの場合、鍛冶屋の口を通して語らせているものの、かなり説明的であり、グリムはそれを削除し、必要最小限を語るメルヒェンの簡素な文体に変えている。具体的にはザックスの68行目からは鍛冶屋の心の中のつぶやきで、「あの技はむつかしくない。僕も彼と同じようにできるさ。僕は義母を若返らせよう。彼女が18才の娘のように飛び跳ねることができるように。」とあり、また73行目からは義母に話しかける部分で「わたしは近くであの技をみておぼえた。彼がどうやって火を焚いて老人を若返らせたかを。あなたもこの世で若返りたくはないか、炉に入りたくはないか言ってください」となっている。この心の中の言葉と義母への話しかけの内容を少しずつ入れ替えてグリムは間接話法の文に統一し、短くしている。

- 80 Sie sprach: Von gantzem hertzen mein. Sie sprach: „Von ganzem Herzen,“
81 Wann sie hett vom jüngling vernommen,
82 Wie es ihn wer so sanfft ankommen weil es dem Jüngling auch so sanft angekommen.
83 Samb wer er in eim thaw gesessen.

ここでは 83 行目がすでに書かれていることの重複なのでグリムでは削られているが、ほかには特に大きな変更はない。ちなみにザックスの 81 行目“Wann”は理由の接続詞の古い形なので、グリムは“weil”に改めている。

またグリムの 82 行目“angekommen.”は第 3 版からは完了の助動詞が副文内でも補われ、“angekommen war.”となっている。

- 84 Bald sie nun suppen hetten gessen,
85 Der schmid ein grosse glut auff-bließ, Machte also der Schmied große Glut
86 Sein alte schwiger darein stieß. und stieß die Alte hinein,
87 Der schmid gar schwind die blaßbelg zug,
88 Die alt sich hin und wider bug die sich hin und wieder bog,
89 Und schryr das mord sehr grausamlich und grausames Mordgeschrei anstimmte;
90 Und waltzet auß dem feuer sich.

ザックスの 84 行目では押韻のためであろうか、唐突に「スープを食べ終わってから」という言葉が出てくる。グリムはこの無駄を削除している。

85 行目の火をたく表現はザックスの文では次の行との押韻の関係から“auff-bließ”となっているが、グリムで“machte”に変更されている。これは恐らくその響きの重なりを避けたためであろう。

87 行目のふいごを引くという文は内容的な重複であるため、グリムでは削除されている。そして老婆がのたうちまわる描写がすぐに続くため、簡

素になっているだけでなく、時間の連続性と緊迫感が増している。そして同じ目的から90行目の火から転げ出るといった描写の文章も削除し91行目に続けている。

- 91 Der schmid der schrey: Sitz darinn still; „Sitz’ still,
92 Erst ich weidlich zublasen will. was schreist und hüpfst du,
93 Was schreyst und thust hupffen und gumpen? ich will erst weidlich zublasen!“
94 Da brunnen all ir haderlumpen. zog damit die Bälge von neuem bis ihr alle Haderlumpen brannten,
95 Erst schryr das weib ohn alle rhu. da schrie das alte Weib ohne Ruh.

91行目では前からの緊迫感とテンポ感を一層高めるために「鍛冶屋は叫びました」という地の文章を削除し、いきなり鍛冶屋のせりふをもってきている。これはグリムのメルヒェン集では非常によく見られるものである。

また押韻から自由であるグリムの版では、ザックスの92行目と93行目を入れ替えることで、流れが整えられ、テンポ感がよくなっている。

グリムの 95 行目“da schrie das alte Weib ohne Ruh.”は3版から“da”を削除し，“das alte Weib schrie ohne Ruhe,”と読点で終えることで、次の文とのつながりを強めている。

- 96 Der schmid dacht, kunst geht nit recht zu, Der Schmied dachte: Kunst geht nicht recht zu!
97 Und sie herauß der esse zog nahm sie raus
98 Und warff sie nein in den leschtrog. und warf sie in den Leschtrog,

グリムの 96 行目は3版から“und der Schmied dachte »Kunst geht nicht recht zu«,”と引用符がつき、感嘆符が取られている。

- 99 Noch schryr und kars laut uberauß. da schrie sie ganz überlaut,

- 100 Das erhörten droben im hauß daß es droben im Haus
101 Die schmidin und ir schnur zanger, die Schmiedin und ihre Schnur hörten,
102 Die warn beyde sehr groß schwanger
103 Und loffen beyd herab die stiegen, die liefen beide die Stiegen herab,
104 Sahen die alten im leschtrog liegen,
105 Die noch thet klagen, weyn und heuln, und sahen die Alte heulend und maulend
106 Zsam gschnurt, gerumpffen, thet sich meuhn. ganz zusammen geschnurrt im Trog liegen,
107 Ir angesicht gleich sah einem affen,
108 Geruntzelt, gfallen und ungschaffen. das Angesicht gerunzelt, gefaltet und ungschaffen.

99行目“karren”は“schreien”と同義の古い語であり、省略されている。

100 行目はザックスでは指示代名詞“das”であるが、グリムは接続詞“daß”に変え 99 行目とのつながりを強めている。

ザックス 101 行目の形容詞“zanger”は“schwanger”にかかる脚韻のための虚辞³³であるため、省略されている。

ザックスでは鍛冶屋の嫁と彼らの息子の嫁が妊娠していることが102行目で挿入句的に差し挟まれているが、グリムでは文章の流れを良くするために省略されている。そして彼女たちが妊娠していることは 109 行目で“die beide mit Kindern gingen,”という言葉で補われている。グリムはメルヒェン集の中では一切“schwanger”という語を用いていない。伝説集では普通にこの語を用いていることから、子供と家庭というコンセプトからほかの言い回しにかえているものと思われる。

107行目の“Ir angesicht gleich sah einem affen”が削られているのは重要である。この説話を猿の由来譚としてとらえる場合、炉から出されて火消し桶に入れられた老婆の顔が猿のようであったということは、後で妊婦達が猿を生むことと呼応関係にある文なので不可欠である。その1文を削除していることは、グリムがこの話の猿の由来譚としての要素を重視してい

ないことの表れである。そのことはグリムがこの説話の題名を「猿の由来（Ursprung der affen）」から「焼かれて若返った小男（Das junggeglühte Männlein）」へと変更していることから言えるであろう。またザックスの版では冒頭で「博士に猿の由来についてたずねたところ」という言葉がはいっており、猿の由来譚であることが印象づけられているが、その部分もグリムの版では削除されている。

それでは、グリムの版での中心テーマはなんであろうか。一つは、すでに述べたように、神々が地上を遍歴し、奇跡を起こすというモチーフである。これはメルヒェンに古い神話の要素を求めるグリムにとって重要であった。もう一つは「神の奇跡とその模倣の失敗」というメルヒェンにとって非常に重要な特徴である。マックス・リュティエはまず、コントラストをメルヒェンに不可欠の要素として挙げている。「コントラストなしにはメルヒェンはその表情を失ってしまうであろう。コントラストはメルヒェンの、極端に表現しようとする形成意志の現れである。そしてコントラストはメルヒェンにおけるその他の多くのものと同様に、極端への意志、力強い様式化への意志の結果として、ある程度おのずから生ずるのである³⁴」。その上でリュティエは「模倣の失敗」をこのコントラストの最も重要なものの一つとして挙げている。「メルヒェンで好まれているコントラスト化の形態の一つは失敗した模倣という図式である³⁵」。グリムもこの模倣の失敗を視野に入れていたという事は、初版第2巻につけられている注からわかる。「老人を若返らせることと失敗に終わる模倣は実にギリシアのメーデアとイアーソンとペリアースの寓話を思い出させる³⁶」。ここで触れられている古代ギリシアの伝説は、メーデアがイアーソンに代わってペリアースに復讐するために、ペリアースを若返らせてやるとそそのかしてその体を切り刻ませるが、ペリアースの娘達はメーデアをまねても彼を生き返らせることが出来ないというものであるが、グリムはここでふたたび、メルヒェンの根底に潜む古さに目を向けているのである。模倣の失敗が、メルヒェンにとって、非常に特徴的であるということに加

え，そのモチーフの古さもグリムがこの説話を採用するにあたっての重要な要素であったと言える。

- 109 Darob die zwo entsetzet warn Darob sich die zwei, die beide mit Kindern gingen, so entsetzten,
110 Und beyd dieselbig nacht gebarn daß sie noch dieselbe Nacht zwei Junge gebaren,
111 Zwey junge, das waren zwen affen, die waren ganz nicht wie Menschen geschaffen, sondern wie Affen,
112 Auch also murret und ungschaffen,
113 Die bald nauß in die wildnuß loffen, liefen zum Wald hinein
114 Von den ander affen außschloffen.
115 Von den kompt her der affen gschlecht. und von ihnen stammt das Geschlecht der Affen her.
116（以下引用済み）

111 行目のザックスでははっきりと「それは2匹の猿であった」と明言されているのに対し，グリムは「人間の様ではなく猿の様であった。」とやわらげた言い回しになっている。グリムの場合107行目の「義母の顔が猿のようであった」という文を削除しているため，いきなりここで猿であったとするのは，多少唐突すぎる。それと同時に，人間が猿を産むというグロテスクさを避けたものと思われる。

ザックスの112行目は108行目までの義母の描写と呼応関係にあるが，グリムでは削られている。

ザックスの114行目は115行目と同義であり，むしろ韻のために入れられているのであろう。重複であるし，“außschloffen (ausschließen)”が古い語であることから削除されている。

3 むすび

さて，長い比較を終わって全体を通して言えることは，まずグリムがザックスの文を出来る限り忠実に残そうとした跡が見られるということで

ある。グリムの時代にはもはや使われなくなっていた語の変更はいくつか見られるものの、単に子供向けの通りの良い文章に語り直すことはせず、そのまま採用した語や文が非常に多いことがわかる。そして、古い語形であっても、類推が十分につくものであれば、初版の段階ではザックスに従った形で採用しており、版を重ねてゆく過程でそれが新高ドイツ語の形に改められている。これは序文で繰り返し言われているように元の語りにできるだけ忠実であろうとしたことの表れであると同時に、グリムがザックスをいかに高く評価していたかがわかる部分でもある。

だからといって全てをザックスに従うのではなく、冒頭部と結末部を削除し構成を変えていることは、グリムがメルヒェン本来の様式を的確に捉えていたことを示しているし、ザックスの国民詩人としての仕事を的確に取り上げたと言えよう。また、テーマの中心を「猿の起源」から「老人の若返りと模倣の失敗」へと変えていることもメルヒェンの本質をとらえた変更である。これらの変更はヤーコプが言うように「数学的な忠実さ」ではなく、本来のメルヒェンを求めようとする「適切な忠実さ」の表れであり、また「たまごの黄身を壊さない変更」と言えるであろう。

そして「キリスト」という語をやめたことや、「模倣の失敗」に解説を補っている態度からは、グリムがいかにメルヒェンの起源の古さを信じ、「忘れ去られた宝」に光を当てようとしていたかをはっきりと示していると言えよう。

参考文献

- Bloom, Lothar: Hans Sachs, Jacob und Wilhelm Grimm: Die ungleichen Kinder Evas. Zur Entstehungsgeschichte von KHM 180. in: Schriftenreihe Werke der Brüder Jacob Grimm und Wilhelm Grimm. Hrsg. von der Arbeitsgemeinschaft “Kommentierte Kritische Ausgabe von Werken der Brüder Jacob und Wilhelm Grimm” Bd. 2, Olms-Weidmann 1995.
- Bolte, Johannes / Polivka, Georg: Anmerkungen zu den Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm. 5 Bde., 3. Nachdruckauflage, Georg Olms Verlag 1982.
- Grimm, Brüder: Kinder- und Hausmärchen. Vergrößerter Nachdruck der zweibändigen

- Erstausgabe von 1812 und 1815 nach dem Handexemplar des Brüder Grimm-Museums Kassel, Hrsg. von Heinz Rölleke, Vandenhoeck & Ruprecht in Göttingen 1986.（初版第 1 巻・第 2 巻）
- Grimm, Brüder: Kinder- und Hausmärchen. Nach d. 2., verm. u. verb. Aufl. von 1819, Hrsg. von Heinz Rölleke, Dritte Auflage, Eugen Diederichs Verlag 1986.（第 2 版）
- Grimm, Brüder: Kinder- und Hausmärchen. Vollständige Ausgabe auf der Grundlage der dritten Auflage (1837), Hrsg. von Heinz Rölleke, Deutscher Klassiker Verlag 1985.（第 3 版）
- Grimm, Brüder: Kinder- und Hausmärchen. Ausgabe Letzter Hand, 3 Bde., Hrsg. von Heinz Rölleke, Universal-Bibliothek, Reclam 1984.（第 7 版）
- Grimm, Jacob: Deutsche Mythologie. 3 Bde., Um eine Einleitung vermehrter Nachdruck der 4. Auflage, Akademische Druck- u. Verlagsanstalt 1968.
- Grimm, Jacob: Gedanken wie sich die Sagen zur Poesie und Geschichte verhalten. (1808). in: J. Grimm: Kleinere Schriften 1. neu herausgegeben von Otfried Ehrismann, Olms-Weidmann 1991.
- Grimm, Jacob: Etwas über Meister- und Minnegesang. in: J. Grimm: Kleinere Schriften 4. neu herausgegeben von Otfried Ehrismann, Olms-Weidmann 1991.
- Grimm, Jacob: Die Ungleichen Kinder Evas. in: Jacob Grimm: Kleinere Schriften 7. neu herausgegeben von Otfried Ehrismann, Olms-Weidmann 1991.
- Grimm, Wilhelm: Über die Entstehung der altdeutschen Poesie und ihr Verhältnis zu Nordischen. in: Wilhelm Grimm: Kleinere Schriften 1. neu herausgegeben von Otfried Ehrismann, Olms-Weidmann 1992.
- Hamann, Hermann: Die literarischen Vorlagen der Kinder- und Hausmärchen und ihre Bearbeitung durch die Brüder Grimm. Hrsg. von Alois Brandl, Gustav Roethe und Erich Schmidt. Mayer & Müller 1906.
- Lüthi, Max: Das Volksmärchen als Dichtung. Ästhetik und Anthropologie, 2., durchges. Aufl., Vandenhoeck u. Ruprecht, 1990.
- Sachs, Hans: Schwanck: Ursprung der affen. in: Hans Sachs, Hrsg. von A. v. Keller und E. Goetze, siebzehnter Band. S. 290-294. Georg Olms Verlagsbuchhandlung 1964.
- Steig, Reinhold: Achim von Arnim und Jacob und Wilhelm Grimm. Bearbeitet von Reinhold Steig. Verlag der Cotta'schen Buchhandlung 1904.
- 小澤俊夫著：「グリム童話の誕生」 朝日選書 1992 年
- 小澤俊夫著：「素顔の白雪姫」 朝日カルチャー叢書 1985 年
- 野口芳子著：「グリムのメルヘン」 勁草書房 1994 年
- マックス・リュティエ著，小澤俊夫 訳：「昔話 その美学と人間像」 岩波書店 1985 年

注

- 1 Grimm, Brüder (1984〔第7版〕) Bd. 3, S. 569 参照. レケは“Beiträger und Vermittler der Märchen”という資料の中で「ハンス・ザックス」の項に KHM 158 も挙げているが、これは KHM 180 の誤植と思われる。
- 2 KHM 147 については Grimm, Brüder (1984〔第7版〕) Bd. 3, S. 499 参照。 Hans Sachs の“Ursprung der affen” (1562) を元になっている。
KHM 148 については Grimm, Brüder (1984〔第7版〕) Bd. 3, S. 500 参照。 Hans Sachs の“Der Teufel hat die Geiß erschaffen” (1556) を元になっている。
KHM 77 については Grimm, Brüder (1984〔第7版〕), Bd. 3, S. 476 参照。 Hans Sachs の“Die vernascht Maid” (1536) と Andreas Strobl の物語 (Ovum paschale oder neugefärbte Oster-Ayr, Salzburg 1700, S. 23-26 所収) の合成である。
KHM 119 については Grimm, Brüder (1984〔第7版〕), Bd. 3, S. 491 参照。 Hans Wilhelm Kirchhoff の物語(1563)と Hans Sachs の1563年の詩およびピラ状印刷物(ein fliegendes Blatt〔Zeitschrift für Volkskunde 4, 1891, S.435 所収)の合成。
KHM 180についてはL.Bluhm, S.43ff. 参照。 Hans Sachs の笑話“Die ungleichen Kinder Evä” (1558) G.R.Widmannのファウスト本 (1599) およびJohann Agricola の“Sibenhundert und funfftzig Deutscher sprüchwörter” (1582)の合成。
- 3 Grimm, Brüder (1986〔初版〕). Bd 1, S. XVIII.
- 4 Steig, S.248 f.
- 5 Steig, S.255.
- 6 Grimm, Brüder (1984〔第7版〕), Bd. 1, S. 21.
- 7 Grimm, Brüder (1984〔第7版〕), Bd. 1, S. 22.
- 8 小澤俊夫(1985), S. 129 ff. および 小澤俊夫(1992), S. 184 ff. 参照。
- 9 Blum, Lothar, S. 43 f. 参照。
- 10 J. Grimm: Etwas über Meister- und Minnegesang. in: J. Grimm: Kleinere Schriften 4, S. 7-9.
- 11 J. Grimm: Die ungleichen Kinder Evas. (1842). in: J. Grimm: Kleinere Schriften 7, S. 108.
- 12 J. Grimm: Gedanken wie sich die Sagen zur Poesie und Geschichte verhalten. (1808). in: J. Grimm: Kleinere Schriften 1, S. 400 参照。
- 13 W. Grimm: Über die Entstehung der altdeutschen Poesie und ihr Verhältnis zu der nordischen. in: W. Grimm: Kleinere Schriften 1, S. 114.
- 14 H. Hamann: Die literarischen Vorlagen der Kinder- und Hausmärchen und ihre Bearbeitung durch die Brüder Grimm. S. 51 参照。
- 15 Grimm, Brüder (1986〔初版〕). Bd 1, S. XVIII.

- 16 Grimm, Brüder (1986)〔初版〕. Bd 2, S. IV f.
- 17 Grimm, Brüder (1986)〔初版〕. Bd 1, S. XV.
- 18 以下ザックスのすべての引用に関しては Sachs, Hans 1964. Bd.17, S. 290-294 より。
- 19 ここで言うメルヒェンでの語り手とは2重の意味をもつ。1つは、グリムが理想としていたフィメーニンのように実際にメルヒェンを語って聞かせる人である。グリムはその語りをできるだけ文章に残したかったはずである。しかしその一方で、グリムは本にする段階で聞くメルヒェンから読むメルヒェンへと変えざるを得なかったわけで、その意味では、虚構テキストにおける、筋の運び手、水先案内人ということになる。
- 20 Lüthi, Max: Das Volksmärchen als Dichtung. S. 62 f..
- 21 3版まではこの形だが、7版では“Zur Zeit, da unser Herr noch auf Erden ging,” と Zur Zeit の後にコンマが補われ、整えられている。
- 22 KHM 127（初版第2巻41番）は「まだ願い事がかなったころ（Zur Zeit, wo das wünschen noch geholfen hat,...）」で始まっている。Vgl. Grimm, Brüder. (1986). Bd 2, S. 211.
- 23 Grimm, Brüder (1986)〔初版〕. Bd 1, S. XIII f.
- 24 Grimm, Brüder (1986)〔初版〕. Bd 2, S. VII f.
- 25 Jacob Grimm: Deutsche Mythologie. Bd. II, S. 823 f. 参照。
- 26 Jacob Grimm: Deutsche Mythologie. Bd. 1, S. XXIX ff.
- 27 ただし KHM 167 では、一箇所だけ Pedrus という方言形がでてくる。
- 28 主語は書かれていないが動詞の形から主語が複数であることがわかる。
- 29 Lüthi, Max: Das Volksmärchen als Dichtung. S. 29.
- 30 第4版から第6版までの資料が手許にないため、何版で変えられたかは特定できないが、第3版までは同形であり、第7版では“über ihn” となっている。
- 31 Grimm, Brüder (1986)〔初版〕. Bd. 2, S. 217, Z.17.
- 32 KHM 127もやはりザックスを元に行っているが、ここではザックスの文からの直接の採用ではない。
- 33 Vgl. Grimm: Deutsches Wörterbuch, Bd. 31, S. 227.
- 34 Lüthi, Max: Das Volksmärchen als Dichtung. S. 109.
- 35 Lüthi, Max: Das Volksmärchen als Dichtung, S. 111.
- 36 Grimm, Brüder (1986). Bd. 2. S. XXXVII.

（ドイツ文学科 非常勤講師）

ハンス・ザックスとグリム兄弟（加藤）